者がでた事故がありました。

国連理事国である強国が競って原水爆の実験を繰り返し行っていた頃の 1954 年 3 月 1 日 ニューキャッスル作戦として水爆実験を南太平洋のビキニ環礁で、米国が行った水爆実験海域の危険海域圏の外で鮪延縄漁をしていた焼津港所属の第五福竜丸が操業中、突如黒い霧状の細かな灰が降ってきて、甲板に黒く積もり、足跡が付いたというから相当な量の放射能を帯びた降灰があったのです。

邦人漁夫ビキニ原爆実験に遭遇

23名が原子病

一名は東大で重症と診断

水爆か

死の灰つけ遊び回る

焼けた

乗組員はどうゆうことなのか意味が分からず，黒い雪が降ってきたと冗談をいっていたらしい、が何か危険を感じて現場から遁れるようとしたのですが、揚げ縄作業中でしたから、作業は十数時間を要し、かつ全乗組員 23 名が甲板上で長時間作業を継続したため、　忌まわしい外部、内部被曝をしてしまったのです。

後の調査では乗組員 23 人が浴びた外部被曝量は、1.7 ～ 6.9 グレイ（Gy）と推定される（主に影響したγ線の場合は、1Gy は 1Sv と換算できる）

この放射線量は急性症状が出る被曝量にあたり、事実　全乗組員が嘔吐、頭痛、皮膚障害、脱毛、白血球の減少などの急性症状が出たという。

焼津港帰港後、直ちに検査を受け、即全員入院となって、懸命の治療にあったが、半年後の 9 月 23 日最年長であった通信長久保山愛吉さんが死亡（享年 40 歳）。

他の乗組員は小康を得て退院したが、健康に優れず過酷な労働である漁船員には戻れず、軽作業の仕事に従事したが、まもなく肝硬変や肝臓癌その他で亡くなったが、被曝との因果関係はハッキリしないまま、プライバシーの問題もあり、ひっそりとこの世を去った。